

満州へ教え子 後悔今なお



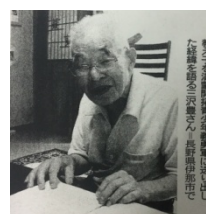
10月6日のNHKナビゲーションは「残留孤児 孤立する老後」。一戦後、中国に取り残された残留孤児たちは、老後、祖国日本で孤立を深めている。7月、国が発表した調査結果で、孤児など帰国者の平均年齢は76歳を超えた。介護や医療が必要な人が増える一方、言葉の壁に直面し、必要なサービスや支援を受けられていない人が少なくないことも明らかになった。歴史に翻弄された残留孤児が人生の最後をどうすれば安心して生きていくことができるのか、課題を探る。

番組を見たあと、標題の中日新聞10月8日朝刊「ニュースを問う」に注目。伊那通信局の岩田忠士記者の記事から。示唆に富むことが多いので、一部だけでも紹介したい。

14、5歳の子どもたちを戦地に「兵」として送り出す国策に加担し、命を散らせた痛切な悔恨は70年以上過ぎた今も消えてはいない。

今年成立した共謀罪の趣旨を含む改正組織犯罪処罰法の審議中、国会に届いた「慎重審議」や「反対」を求める地方議会の意見書は、長野県が15件で全国最多。保守層も含む強い抵抗感は、治安維持法違反で弾圧された「二・四事件」、その反動で全国最多の満蒙開拓青少年義勇軍を旧満州(中国東北部)に送った「癒えない」思いが根強くあるからだろう。

「満州は日本の生命線だ。広い沃野は君たちを待っている」。三沢豊さん(94)=同県伊那市=は、国民学校高等科2年(現在の中二)だった教え子の「昇君」に満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ行くよう背中を押した自分のせりふを今も覚えている。46年、復員を果たした三沢さんが勤め先の学校に行くと、校庭の片隅に5、6人の教え子がいて、1人がにらむような目つきで言った。「三沢を許してやる、戦争に行ったから。だがな、戦争に行け行けとあれほど勧めた連中が、今は『あの戦争は正しくなかった』と言っている。そんなばかなことがあるか。死んだやつもいるんだ」。何も言えずその場を立ち去った。昇君が大陸で命を落としたこと、弟妹たちが悲惨な生活を強いられたことを後に知った。



葛藤の末に教壇に戻った三沢さんは30年ほど前、ずっと訪ねられずにいた昇君の墓を初めて参った。落ち葉をかき分けると、漬物石ほどの石が出てきた。「昇の墓」。くぎで刻んだように書いてあった。消えそうになった字を何度もなでながら自分を責めた。

「国の言うことをうのみにして、満州行きを勧めてしまった。ばかだった」

三沢さんは、今の世相をこう見つめる。「反動的な空気が強まっているのは心配だが、乗り越えられるのではと思う。昔とは違い、今は流れを押しとどめたり、乗り越えたりする力が育っているから」。言論の自由がなく、戦争協力に背くことを全く許されなかった時代を知る証言者からの重い示唆だった。(2014年10月15日)